※本記事は、週刊読書人の許可を得て引用しています。

学術読物

不調を引き起こす「怪異」を読み解く

ジェンダーの視点から伝承に迫る労作

野上 暁

安井 眞奈美著
狙われた身体
病いと妖怪とジェンダー

四六判・276頁・3080円
平凡社
978-4-582-83892-3
TEL.0570-045-820

「アマビエ」は、一般にはあまり知られていない妖怪だったが、コロナ禍で疫病除けとしてSNSで拡散したことからにわかに脚光を浴び、キャラクター化して様々に商品化され、厚生労働省が感染拡大防止の啓発のために使うまでにもなった。

「病いと妖怪」はアマビエのことかと思われるかもしれないが、そうではない。この本は、「病い」という「見えない敵」を可視化する経緯で図像化された妖怪を、民俗学とジェンダーの視点から歴史的に読み解くという画期的な試みなのだ。ちなみにアマビエは、江戸時代に、コロリという疫病が流行るので自分の絵を描いて人に見せるようにと告げた予言獣「アマビコ」が流行したことがあり、その変異株の様なものだと『図説日本妖怪史』（河出書房新社）で香川雅信は記している。

近世の日本では、麻疹や疱瘡などの感染症から身を守るために、疱瘡守護神の掛け軸を飾ったり疱瘡神祭をしたり、疱瘡見舞いに赤一色の絵を送ることが流行ったという。一五六八（永禄一一）年、戦国時代の針治療の名医の写本『針聞書（はりききがき）』では、腹痛を起こす腹の虫には「悪血」や「血塊」「胞衣の血積」など気味の悪い虫としてキャラクター化して描かれたと図入りで紹介されるなど、カラー口絵四ページを含め随所に多数の図版が掲載されているのが本書の大きな魅力である。

妖怪や怪異に関する伝承から浮かび上がってくる狙われやすい身体部位は、足、手、目、頭、首などで、必ずしも命にかかわる急所ではない。そこで、どのような部位を襲う「カマイタチ」、頭痛を起こす「イズナ」や「ミサキ」などを紹介しながら、襲われる部位と鍼灸のツボの関係性のやその対応策などを民間伝承から探り出しながら、それによって女性が死亡した事件が、偶然にも阿部定事件が起こった分析も面白い。

女性器が蛇に狙われ、昼寝中に侵入された事例どんな妖怪や悪霊が攻撃を仕掛け心身の不調を引き起こすのか。脛や脹脛

一九三六年に重なり、集中的に話題になったというのは興味深い。女性器を蛇に襲われた女性の多くは亡くなるが、阿部定事件では男性器を切り取るという去勢を彷彿させる猟奇事件である。前者は民俗社会の語りとして尾ひれを付けて男たちの口伝で各地に伝わり、後者は小説や映画にもなり大きな話題となったという性に対する非対称的な意識の在り様は、狙われる身体が多くの場合、女性の身体だったことに由来するといい、それは、寝ている間に男に襲われた暗喩ではないかとも推察する。

一方で、蛇になった女が男を襲う安珍と清姫の『道成寺縁起』などを手掛かりに、妖怪とジェンダーに迫っていく。まず、妖怪に性差があるのかと問い、近世に至るまで妖怪は鬼や天狗に限定され、個別の名称が与えられなかったこと。一八世紀になって、地方文人による奇談・怪談集の編纂が影響を与え、妖怪の名称が爆発的に増えたといい、その大半が俳諧に詠まれているというのだ。中でも、もっとも好んで詠まれたのが「雪女」だというのも、何となくうなずける。

女の妖怪としては、他にも「山姥」を筆頭に、川に住む老婆妖怪の「河姥」、海底に潜った海女を思わせる「共潜（ともかつぎ）」、海坊主の女房だという「海女房」、美女姿の氷の精「つらら女」、姥の亡霊の火の玉「姥火」、「火消し婆」、「砂かけ婆」、女が多い「ろくろ首」、「お歯黒べったり」、「二口女」、「産女（姑獲鳥）」など結構たくさんいる。

ジェンダー的観点から、老年男性の「翁（おきな）」「爺」「媼（おうな）」と、老年女性を示す「姥」「婆」の名称を持つ妖怪を拾い上げると、意外な事実が浮かび上がる。「山姥」「姥が火」「火消婆」「古庫裏婆」「白粉婆」など老婆妖怪は多いが、老爺の妖怪は見つからないのだ。宮田登は「男の心意にある潜在意識が、性と妖怪を結びつけるキーワードであり、女の妖怪を多く輩出させているのではないか」と分析しているという。そして著者は、老いた女性が妖怪になるのに対し、老いた男性は神になると、能楽の演目に注目して「翁、神になり、媼、怪となり」と述べる。

女性器の威力を日本と海外の例から文化人類学的に検証したり、性器の妖怪や両性具有の妖怪、巨大性器崇拝の祭事など、民間説話や絵画資料に現れる病や妖怪に関わる膨大な資料を基に、それをジェンダー的に解読した実にエキサイティングで、しかも今日的に示唆されることの多い労作である。（のがみ・あきら＝編集者・評論家）

★やすい・まなみ＝国際日本文化研究センター研究部教授・文化人類学・民俗学。著書に『出産環境の民俗学』『怪異と身体の民俗学』など。一九六七年生。